

原油市況

原油価格（WTI 期近・終値）は、120 ドル台前半に反落した後、6月6日にドル安ヘッジの原油買いにより、一日で10ドルを超す急騰となり、138ドル台と史上最高値を更新。その後も在庫減少、産油国の生産懸念などから高止まりしている。6月22日開催の石油消費国と産油国との緊急閣僚会合でサウジアラビアが増産する意向を表明したが、他の産油国が増産に消極的であることから短期的な価格への影響は反応薄となっている。

米国経済

米国では、1～3月期の実質GDP（改定値）が前期比年率+0.9%と2四半期続けて同+1.0%を下回る低成長となったが、外需堅調による下支えなどもあり、「景気後退」とはなっていない。なお、米FRBは07年9月以降08年4月まで、政策金利（FF金利）を計7回で合計3.25%引き下げて、2.0%とした。6月に入り米FRBがドル安抑制やインフレ懸念に関して、これまでより踏み込んだ発言等を行ったことから米国で早期利上げ観測が強まった。しかし、景気の先行き不安が残るとともにサブプライム問題の落ち着きも見られていないのが実情である。

国内経済

わが国では、雇用情勢や設備投資などで弱い動きが見られるほか、好調だった輸出にも鈍化傾向が見られる。4月の鉱工業生産指数（速報）は前月比▲0.2%と2ヶ月連続で低下。ただし、先行き5月は前月比+4.7%、5月は同▲0.9%となる見通し。設備投資の先行指標となる機械受注（船舶・電力を除く民需）の4月分は前月比+5.5%だった。米国経済の持ち直しにより、再び輸出が回復するという見方もあるが、原材料価格上昇などによる企業収益の減少や消費者心理の悪化などもあり、景気の先行きは不透明である。

金利・株価・為替

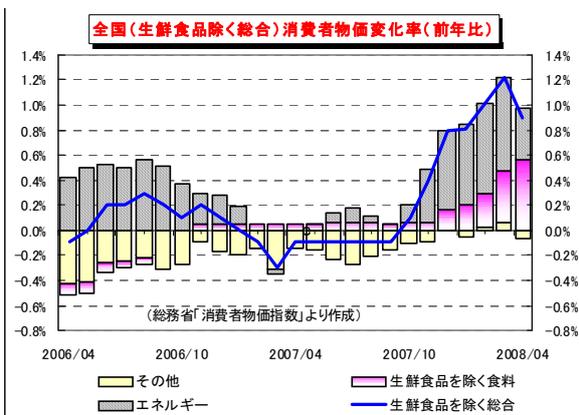
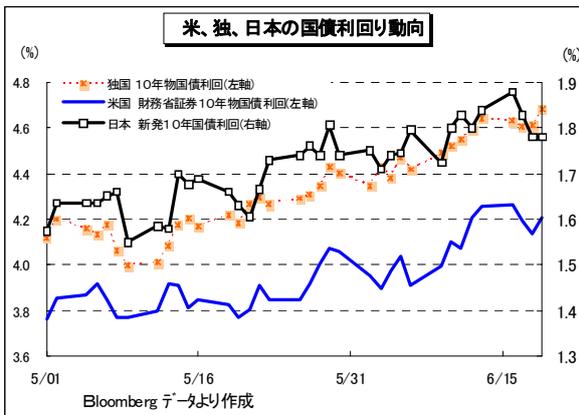
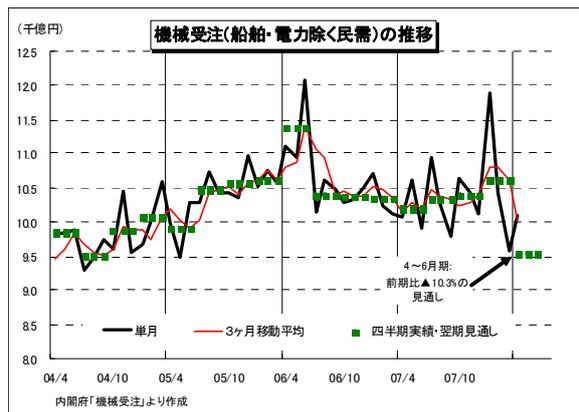
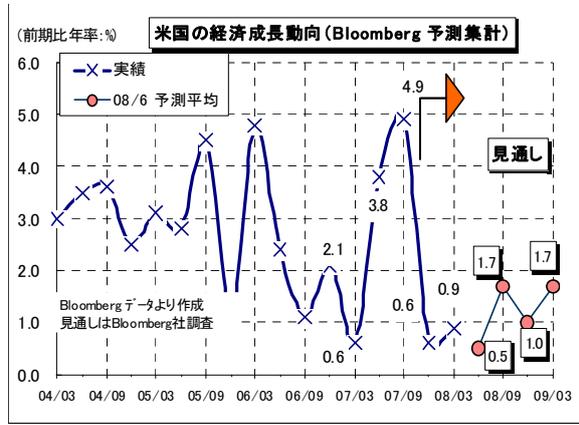
外為市場では、ユーロ・ドル相場が4月下旬には一時1.6ドル台まで上昇。ドル円相場も3月中旬には一時95年8月下旬以来の円高水準となる95円台となった。しかし、このところは、米国で当局者によるドル安警戒感の表明や早期利上げ観測の強まりによりドルが買い戻され、1ユーロ=1.55ドル近辺、円に対しては1ドル=108円台近辺で推移。日経平均株価は、円高や世界的な信用不安などから下落し、3月中旬には1万1,700円台となった。しかし、4月以降の信用不安の後退や円安の動きなどから持ち直し、このところは1万4,000円を挟んで推移。日本の長期金利の目安である新発10年国債利回りは、インフレ懸念の高まりに伴う世界的な長期金利の上昇傾向につられ、6月中旬に1.8%台後半まで上昇した。

政府・日銀の景況判断

政府は6月の景気判断を「景気回復は足踏み状態にあるが、このところ一部に弱い動きがみられる」と、3ヶ月ぶりに下方修正した。先行きについては、米国の景気後退懸念や原油高などから「下振れリスクが高まっている」との判断を示した。

一方、日銀は6月の景況判断を前月と同様に、「エネルギー・原材料価格高の影響などから、減速している」とした。ただし、先行きは「当面減速が続くものの、その後緩やかな成長経路をたどる」と見ている。また物価の先行きについても「国内企業物価は、当面、国際商品市況高などを背景に、上昇を続ける可能性が高い」としている。（08.6.20 現在）

内外の経済金融データ



(詳しくは、ホームページ・トピックス・[今月の経済・金融情勢] <http://www.nochuri.co.jp>へ)